

山田方谷

幕末の政治家、財政家、教育者であり優れた漢学者。備前松山藩士。板倉勝静に重用され、数々の藩政改革を断行。巨額の借財で窮乏していた藩財政を建て直し、大きな富積を残した。

生い立ち／藩政改革前

安永元年（1796）12月21日、備前松山藩士として生まれた。藩内でもっとも優秀な家系で育つ。藩政改革の中心として活躍することになる。藩政改革の中心として活躍することになる。

少年期

◆九川松陰塾に入門

同族の大きな期待を受け、父方谷は文化元年（1804）15歳の時に新見藩・大山松陰塾に入門。松陰塾のめがけはまさしく、神童であつた。

◆父母の死、家業を継ぐ

父の死に際して、方谷は家業を継ぐことになった。方谷は公儀の漢学を守り、家業と学問の両立に努めるが、この時期漢学を講じた藩政や、藩人と交わった経験が、後に藩政改革を成功に導く契機となつた。

遊学期

◆備前松山藩に登用、遊学へ

仕事に精進しながらも学問もあつた。しかし方谷の活躍はあまり、方谷は藩士統制機構の中心人物と見られ「藩政有終終」である。学問をこつこつと漢学を講じた。松山藩に遊学された方谷は京都、江戸へ遊学。京都では高島綱常と学び、江戸では伊藤「聖堂」入門。一躍大層な方谷が蘭学者としての立場を確立する大きな契機をもつたのだ。

教育期

◆人生の転機 板倉勝静との出会い

藩士より階級し、教育に専念したい。方谷は松山藩士・板倉勝静の横着子ととも大規模的教育をとも。勝静は方谷の意見と熱意に打たれ、方谷の勝静が藩士となり、藩政改革を断行する際に方谷の抜擢してあげた。



板倉勝静の書
「天下太平」
（寛政13年）
（備前松山藩蔵）



治國平天下
（寛政13年）
（備前松山藩蔵）



備前松山藩士・板倉勝静の横着子ととも大規模的教育をとも。勝静は方谷の意見と熱意に打たれ、方谷の勝静が藩士となり、藩政改革を断行する際に方谷の抜擢してあげた。



方谷の陽明学

方谷の陽明学

方谷は陽明学を「誠意」を中心とする。誠意とは「心」を正すこと。心正すれば、自然と行は正し、行は正せば、自然と知は正し、知は正せば、自然と徳は正し、徳は正せば、自然と道は正し、道は正せば、自然と天下は平す。これが陽明学の基本である。

方谷は陽明学を「誠意」を中心とする。誠意とは「心」を正すこと。心正すれば、自然と行は正し、行は正せば、自然と知は正し、知は正せば、自然と徳は正し、徳は正せば、自然と道は正し、道は正せば、自然と天下は平す。これが陽明学の基本である。

誠意	心正す
格致	行は正す
知	知は正す
徳	徳は正す
道	道は正す
天下	天下は平す

方谷の陽明学

方谷は陽明学を「誠意」を中心とする。誠意とは「心」を正すこと。心正すれば、自然と行は正し、行は正せば、自然と知は正し、知は正せば、自然と徳は正し、徳は正せば、自然と道は正し、道は正せば、自然と天下は平す。これが陽明学の基本である。

